

令和元年6月5日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02263

研究課題名（和文）フランス両大戦間における女性芸術家の活動環境

研究課題名（英文）The "milieu" of female artists in France between the two wars

研究代表者

天野 知香（AMANO, Chika）

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：20282890

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀の両大戦間フランスにおける女性芸術家の活動が活発となった背景として、従来漠然と言われていた第一次世界大戦後の社会状況の変化にとどまらず、その活動環境の具体的な特質を捉えることを目的とした。マリー・ローランサン、アイリーン・グレイを始めとするいくつかの具体的な事例の検討の結果、こうした芸術家たちをとりまくさまざまな領域で活躍する女性同士の人的ネットワークが、その活動を精神的及び実質的な側面で支えるにあたって重要な意味を持ったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来漠然と捉えられていた第一次大戦後のフランスにおける女性芸術家の活動環境をいくつかのケーススタディを通して具体的に検討し、明らかにしたことは女性芸術家研究に実証的理論的に寄与するものである。本研究はさらにこうした実証的な検証を通して、20世紀美術における評価や語りの枠組み自体を再検討することを試みた。また近代の歴史的事例を通して女性の社会的な活動のために重要な要因を明らかにしたことは、今日における女性の多領域における活躍の条件を考えることにも直結する有意義な研究であったと言える。

研究成果の概要（英文）：Without remaining in the so-called social changes after World War I, this project has tried to elucidate the "milieu" of the activities of female artists in France between the two wars of the 20th century. Focusing some case studies about Marie Laurencin and Eileen Gray, this research figured out the importance of the networks of women that brought substantial and mental supports for their activities.

研究分野：西洋近代美術史

キーワード：女性芸術家 両大戦間フランス マリー・ローランサン アイリーン・グレイ ジェンダー 装飾芸術

## 1. 研究開始当初の背景

第一次大戦後のフランスにおいては、それまでの時期に比べより多くの女性芸術家が活躍したことが指摘され、そうした女性芸術家に関するいくつかのモノグラフや展覧会が行われてきた。こうした従来の女性芸術家研究は貴重な実証的な事実を明らかにすることに貢献したが、ともすれば事例の集積や追加にとどまり、その活動の構造やメカニズムを時代的社会的な文脈と個別的な実証性を踏まえた上で、理論的に考察・分析する視点にかけていた。従来の研究はそれぞれの個別の芸術家に関する情報を提供し、両大戦間の女性芸術家の活躍を跡づけるものではあったが、彼女たちがなぜこの時期にこのように数多く活躍することができたのか、という状況に関しては、個別の背景と一般的な時代状況から説明されるものが大半であった。同時に彼女たちの活動やその芸術上の意義については、常にキュビズムやシュルレアリスム、あるいは当時のモダニズムの動向等々のものでよく知られている男性を中心とした前衛グループや男性芸術家との関係で語られ、女性芸術家の活動自体はその派生的、あるいは周縁的存在として従属的な形で位置づけられ、多くの場合既存のモダニズム的な運動の研究から引き出された価値観や視点に基づいてその活動が位置づけられ、評価されてきた。

個別的な先行研究としては、まずマリー・ローランサンに関しては、その伝記もいくつか出版されてきた (Flore Groult, *Marie Laurencin*, Paris, Mercure de France, 1987. 邦訳: フロラ・グルー、工藤庸子訳『マリー・ローランサン』新潮社、1989年。José Pierre, *Marie Laurencin*, Somogy, 1988. 邦訳: ジョゼ・ピエール、阿部良雄訳『マリー・ローランサン』美術公論社、1991年。Meyer-Stabley Bertrand, *Marie Laurencin*, Pygmalion, 2013.) 1986年には、日本の蓼科高原に当時あったマリー・ローランサン美術館の支援で、ダニエル・マルシェッソーによるカタログ・レゾネ『油彩作品目録』(マリー・ローランサン美術館)が出版された。また内外でこれまで多くのローランサンに関する展覧会が催され、国内におけるローランサン回顧展の一つに際して展覧会カタログに所収された拙論は、ローランサンの活動を同時代の美術史的なコンテクストにいて位置づけ、本研究の出発点となった(「マリー・ローランサン 女性、装飾、絵画」『マリー・ローランサン 1883-1956』東京都庭園美術館、共同通信社、2003年)。しかしローランサンに関する女性芸術家としての学術的な研究の出版は必ずしもおおくなく、本研究に関連して特に重要な先行研究 (Elizabeth Louise Kahn, *Marie Laurencin, Une femme inadaptée in feminist histories of art*, Ashgate, 2003.) を踏まえつつ、新たな切り口による実証的な分析が必要であった。

一方アイリーン・グレイに関しては長期間の忘却の末 1968年のジョセフ・リクワートの雑誌記事を嚆矢としてその再評価が始まった。しかし当初の評価はモダニズムの巨匠建築家ル・コルビュジェとの関係においてそのモダニズム的側面を評価する視点が中心であった。ほどなくして 1970年代には両大戦間の装飾芸術の再評価とともにアール・デコの漆を用いた装飾芸術家としてのグレイの評価も高まり、1987年にはピーター・アダムによるモノグラフが出版され (Peter Adam, *Eileen Gray, Architect/Designer*, New York, Abrams, 1987. 邦訳: ピーター・アダム、小池一子訳『アイリーン・グレイ』リプロポート、1991年)、2013年にはパリとダブリンで大規模な回顧展が開催され (Cloé Pitot, éd., *Eileen Gray*, Paris, Centre Pompidou, 2013)、2015年には詳細な伝記的事実を掘り起こした新たなモノグラフも出版された (Jennifer Goff, *Eileen Gray, Her Work and Her World*, Sallins, Irish Academic Press, 2015.)。グレイに関するフェミニズムの視点を交えた研究は、ビアトリス・コロミーナによるル・コルビュジェとの関係についての重要な論文 (Beatriz Colomina, "War on Architecture: E.1027", *Assemblage*, The MIT Press, No.20, April 1993, pp.28-29; *Id.*, "Battle Lines: E.1027", *Center*, no.9, 1995, pp.22-31) Diana Agrest, Patricia Conway, Leslie Kanes Weisman, eds., *The Sex of Architecture*, New York, Harry N. Abrams, 1996. pp.167-182. 邦訳: ビアトリス・コロミーナ、篠儀直子訳、「戦線—「E1027」」、『10+1』、No.10, 1997年。218-226頁。) に始まり、カロリーヌ・コンスタンはその建築作品に関して従来のモダニズム的な視点を批判的に捉え直した (Caroline Constant, *Eileen Gray*, London, New York, Phaidon Press, 2000.)。さらに本研究にあたって重要な概念を提示した先行研究としては次が存在した (Jasmine Rault, *Eileen Gray and the Design of Sapphic Modernity*, Farnham, UK, Burlington, USA, Ashgate, 2011.) が、当時の自立した女性たちにとっての室内構成の問題を含めた時代の文脈における総合的な検証はなお課題として残った。

## 2. 研究の目的

こうした既存の研究状況に対して、本研究は、従来の研究に見られるような男性を中心とした前衛グループや著名な男性芸術家との関係から女性芸術家の活動をみることにとどまらず、彼女たちが有した特に女性芸術家同士や女性のコレクターや注文主等との固有のネットワークに着目し、当時様々な領域で社会に登場した女性たちがそのジャンルを超えて交流し、互いに実質的、精神的な支援状況を形作っていたことを明らかにすることを目指した。加えてこうした芸術環境の中で活動した彼女たちの芸術のあり方は、単に男性を中心とした前衛グループの価値観を反映するだけではなく、こうしたネットワークの中で生産・受容・評価されることを通じて、彼女たち自身の経験を通して、むしろ主流の価値観を差異化する特質を有していたことを明らかにしようとし、それによって、20世紀の両大戦間における美術史の語り自体を新たに捉え直すことを目的とした。

### 3. 研究の方法

具体的には、パリの国立図書館、国立美術史研究所、マルグリット・デュラン図書館、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館アーカイヴ(別館)および各作品所在地(フランス、ロックブリュヌ=カップ=マルタン他)等において、マリー・ローランサン、アイリーン・グレイを始めとする女性芸術家の具体的な事例を作品調査と文献調査を通して詳細に検討・分析し、同時代の文脈において検討・考察することを重ねた。特にローランサンについてはその肖像作品に注目し、肖像に描かれた人物との関係や交流を書簡等を含め調査した。またアイリーン・グレイについてはその作品を調査・分析すると同時にその活動実態や交友を資料的に検証した。加えて理論構築の比較例として、現代美術を含む広範な女性芸術家関連の資料、作品、展示を参照した。

### 4. 研究成果

本研究では、まずマリー・ローランサンについて、特に彼女が両大戦間に多く描いた肖像画に着目してその注文主を調査し、加えて彼女の伝記的な情報や書簡の検討を通して、彼女が富裕で上流階級のコレクターのみならず、当時のフランスで新たに台頭するとともに女性の作り手の活躍の場となった服飾および美容業界において活躍した女性たちを多く顧客とし、また交流したことが顕著に認められた。彼女が20年代、30年代に描いた肖像画には、コレクターとして知られていたグルゴ男爵夫人をはじめ、エティエンヌ・ド・ポーモン夫人等芸術に造詣の深かった上流階級の顧客やその妻に加え、ファッション・デザイナーとして有名なココ・シャネル、帽子デザイナーであったローズ・デスカ、美容業界で成功したヘレナ・ルビンシュタイン、イギリスのファッション業界で活躍したマジ・ガーランド、さらに文筆家のエリザベス・ポルケロールやマルセル・オークレル、歌手のスージー・ソリドール等が描かれている。またファッション・デザイナーのポール・ポワレの妹で装飾家のアンドレ・グルーの妻であったニコラ・グルーとは生涯を通じて深い親交をむすんだことが知られており、グルーの装飾芸術が1925年のパリの現代産業装飾芸術国際博覧会に出品された際にはローランサンの絵画も合わせて出品された。また女性装飾家ローズ・アドレールとも交友した他、当時の有名女優ジェーン・ルヌアールは彼女の作品をコレクションした。またローランサンはアメリカ人の文筆家でレズビアンとしても知られたナタリー・バーニーがパリで展開していた芸術家のサロンにも関わっていたことが知られている。こうした交友や関係は単に両大戦間のエピソードにとどまるものではない重要な意義を持っていた。すなわち当時の新興産業の中で新しい可能性を開き成功し、かつ経済的にも自立した女性たちは、同じように両大戦間の人気画家となり、当時のライフスタイルのリーダーとして女性向けの雑誌記事に取り上げられたりするようになっていたマリー・ローランサンに肖像を描かせ、作品を購入することで、その制作を実際的に支援しただけではなく、互いの活動のさらなるエンパワーメントに利用しあい、助力し合ったと言える状況が伺えるのである。マリー・ローランサンは第一次大戦前、批評家ギヨーム・アポリネールの恋人としてキュビズムのミリュールから出発し、第一次大戦期にはフランシス・ピカビアやマックス・エルンストなどダダイズムの男性芸術家などとも交流したことが知られていたが、その作品においては初期のキュビズム様式から短期間で脱し、両大戦間においては独自の様式で複数の女性たちが集う女性だけのクローズした楽園的な情景を数多く描いている。男性中心の前衛的な活動から距離をおき、女性性をその作品において前面に掲げて強調したことは、ローランサン自身、その晩年の言葉において自覚的に捉えていたが、それは女性たちが数多く活動した両大戦間にあっては、男性中心の前衛からの脱落という否定的な側面よりはむしろ、実際両大戦間のパリにおいてその後のアメリカ中心的なモダニズム的な価値観は必ずしも主流とは言えなかったことはすでに周知の事実である。女性たち同士における承認とその親密な関係によって彼女たちの活動自体を精神的にも支え、そうした関係を肯定する新たな価値を展開することへと結びついたといえるのである。

装飾家、建築家であったアイリーン・グレイについても、従来彼女の恋人でもあったとされる建築家で建築雑誌の編集者であったジャン・パドヴィッチや、一時期良好な関係を有していたル・コルビュジェとの関係でもっぱら語られており、またそのモダニズム的な方向性を共有したことによって評価されてきた。しかしこうした見解は近年の先行研究において相対化されている。こうした動向を踏まえた上で、本研究では、南仏ロックブリュヌ=カップ=マルタンに建設された《E.1027》と呼ばれた建築作品を含め、アイリーン・グレイの作品と資料を新たに検討し、また当時の自立した女性たちにとっての室内のあり方といった問題を新たに検討することを通じて、建築及び家具等のデザインにおけるモダニズムの差異化のあり方を、作品自体の検討と当時の批評、および建築作品発表時の彼女自身の言葉も含めた言説分析の双方から具体的に明らかにした。特にこれまで等閑視されてきた漆による装飾芸術家としての初期の活動にも細かく目配りをする中で、彼女の活動を総合的に検討した。他方でグレイの活動を支えたのは、最初に彼女の作品を購入したジャック・ドゥーセといった男性コレクターや、彼女を建築の世界へ導いたパドヴィッチにとどまらず、当時の自立した女性たちのネットワークであることもまた検証した。実際、彼女に最初に総合的な室内装飾の機会を与えたのは、服飾店を所有していた女性ジュリエット・レヴィであり、グレイは彼女のために後のモダンな素材による機能的な家具にも結びつく新たなコンセプトの漆の屏風や従来の男性性を帯びたスタイ

ルとは異なった新たな形式の家具を制作した。またローランサンと同様、グレイもまたナタリー・バーニーのサロンとの交流が知られており、グレイの初期の装飾作品について重要な批評を行ったエリザベス・ド・グラモン（クレルモン＝トネール公爵夫人）やグレイの敷物を購入したロメイン・ブルックスはバーニーと非常に親しい関係を結んでいた。さらにこうした20年代のパリに集まった経済的に自立した、仕事を持つ女性たちとの交流や協力が、彼女の制作や作品の販売に関して非常に重要な意味を持っていたことは、むしろ強調されるべき事実である。アイリーン・グレイが漆製品や敷物、家具などを販売するために1922年にパリに開いた店ジャン・デゼールの顧客たちには、多くの男性顧客もいた一方、芸術愛好家として知られるベアータ伯爵夫人のような上流階級の女性たちや、デザイナーのエルザ・スキャパレリなど自立した女性アーティストたちも含まれていた。またこの店の主力商品の一つであった敷物をグレイの下絵に基づいて制作したイヴリン・ワイルドや、店のマネージメントを担ったガブリエル・ブロックといった女性たちの協力も重要だった。店では友人の女性芸術家シャナ・オルロフの作品も、展示された。こうした女性たちによる協力関係は、女性たちが私的な場面だけではなく、制作やビジネスの場面でともに協力しながら活動していたことを示しており、こうした女性同士が形作る絆や環境（ミリュー）が、当時の女性たちの実際的な精神的なエンパワーメントに貢献していたことを物語っている。

以上のように具体的なケース・スタディを積み重ねることによって、当初の研究目的が十二分に明らかにされると同時に、さらに新たな研究課題として、同時代のメセナとしての女性たちの重要性やそうした女性たち自身の交流もまた浮き彫りになった。例えば、マリー・ローランサンがその肖像を描いたヘレナ・ルビンシュタインは、両大戦間フランスに置いてコレクターとして重要な役割を果たしたが、彼女自身1909年にパリに店を開いた際には、ナビ派との関係やバレエ・リュスの支援でも知られたミシア・セールや小説家のコレット等を顧客としたことがパリにおける活動を支えることになった。さらに彼女は両大戦間に芸術家の作品をもとにタピスリーを制作して販売すると同時にコレクターでもあったマリー・キュトーリとも交流した。こうしたコレクターやメセナとして活躍した女性たちの活動を、さらに詳細に分析することは今後の研究の課題となった。加えて芸術家を取り巻く批評家、画廊主を含めた多様な側面から芸術に関わることで両大戦間の女性の芸術活動を支えた女性たちの活動実態の研究を積み重ねることによって、今回の成果を踏まえた美術史の語り直しをより包括的に進めてゆくことを今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

(1) 天野知香『装飾と「他者」 両大戦間フランスを中心とした装飾の位相と「他者」表象』ブリュッケ、2018年。

(2) 天野知香「美術における身体表象とジェンダー 眼差しの権力とフェミニズムアート」田中正之編著『現代アート10講』武蔵野美術大学出版局、2017年、91-110頁。

(3) 天野知香「モダニズムを差異化する アイリーン・グレイについて」鈴木杜幾子編著『西洋美術：作家・表象・研究 ジェンダー論の視座から』ブリュッケ、2017年、57-100頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

(1) 研究分担者  
なし

(2) 研究協力者  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。